めりといへり、喜撰式に、若詠不忌物時うたかたといふと見え、又船うたかたといふとも見えたり、○略中倭名抄に沫雨をよめり、淮南子注に、沫雨雨潦上、沫起若覆盆と見えたり、方丈記に、逝川の流は絶ずして、さかももとの水にあらず、流にうかぶうたかたは、かつ消かつ結んで、久しくとゞまる事なし、世中に在人のすみかと住居と、またかくの如しといへり、樂普和尚浮漚の歌に、雲天雨落庭中水、水上漂漂見漚起、前後相續無窮已、本因雨滴水成漚、還緣風激漚歸水と見えたり、未必と義通へり、万葉集に、

うたかたもいひつゝもあるか吾あらば土には落じ空にけなまし

新後撰集に

水の面にうきてたゞよふうたかたのまた消ぬまにかはる世の中、未必と沫雨と兩義をかねてよめる歌、後撰集に、

おもひ川絶ず流るゝ水のあわのうたかた人にあはで消めや

〔後撰和歌集十三戀〕をとこのつらうなりゆくころ、雨のふりければつかはしける、

よみ人さらず

ふりやめば跡だにみえぬうたかたのきえてはかなきよを頼むかな

雜載

〔古事記上〕其神○八千矛神之嫡后、須勢理毘賣命、甚爲嫉妬、故其日子遲神和備氏、三字以レ音自出雲將上坐倭國而束裝立時、片御手者繫御馬之鞍、片御足蹈入其御鐙而歌曰、○略中阿佐阿米能佐疑理邇多多牟ゾ叙、○略下

〔日本書紀二十敏達〕十四年三月丙戌、物部弓削守屋大連、自詣於寺、踞坐胡床、斫倒其塔、縱火燔之、幷燒佛像與佛殿、既而取所燒餘佛像令棄難波堀江、是日無雲風雨、

〔日本書紀二十皇極〕元年十月、是月行夏令、無雲雨、